はじめに

トリアングルは、主人公薫里という女性の一人称で語られる小説である。
文中に短歌が挿入されているが、主人公は俳句の創作は初心者だと書かれている。
薫里の職業はフリーライターだが、短歌を詠む趣味があるという表現もない。
つまり、文中に短歌が挿入されているのは、作者が歌人である俵万智ならではの趣向、ということになる。
小説の場面とかけ離れた短歌ではなく、その場面や主人公の心理描写に沿った短歌なので、補う面もあれば、小説としては奇異な印象を受ける場面もある。
これらは読者のほうも賛否両論あると思われる。
また、主人公である薫里は、作者である俵万智自身であるかのように、錯覚させられる。
例を挙げれば切りがないが、家族構成、両親が住んでいる県、現在の職業、趣味、食事や飲酒の嗜好、隙間の時間に眠る特技などは、作者のエッセイでも確認できる二人の同一項目である。（誕生日は一日違いである）
が、一方で、正反対の箇所がある。
薫里の料理についての描写である。

料理は好きだからよく作るが一中略一日常的なルーティンとしての料理ではない。Ｐ49
いずれにせよ、肉じゃがとかサバの味噌煮とかいった「おふくろの味」系のものには、まるっきり縁がない。Ｐ59

俵万智のエッセイ　りんごの涙所収
「万智ちゃんの蕗」
所属している短歌の会の花見に、毎年蕗の煮付けを持参する、と書かれている。
田舎で母と一緒に台所に立っていた高校生の頃、教えてもらった。Ｐ46（文春文庫版）

俵万智のエッセイ　かすみ草のおねえさん所収
「父の転勤」
もともと料理は好きなのだが、食べてくれる人がいるとなると楽しさ倍増、気力充実、いろいろと手のこんだものを作っては、父の帰りを待つ。Ｐ88（文春文庫版）

俵万智は、家庭料理が好きな、かいがいしい女性、という実像が浮かぶ。
なぜ違うのか？
ここまで類似点ばかりが目を惹きながら、違和感を持った。
また、トリアングルが連載されていた２００３年当時、俵万智氏は妊娠していた。
出産後、上梓された。

第１章　薫里とM

薫里とMは仕事を通じて出会った。
ライターとカメラマンという組み合わせで、月１回の１年間にわたる取材の中、薫里はMの仕事ぶりや人となりを知っていく。
そして１年後、Mは薫里をパリ旅行へと誘う。
薫里２５歳、M３７歳の時である。

Mはまるで、来週お茶でもいかが？　というような自然な調子で話している。Ｐ71
よく見ると、出発便の時刻にあわせたスカイライナーの切符まで入っている。このスカイライナーに乗ったら、もうあともどりはできない、ということだ。Ｐ72

ひとまわり年下の女性を、不倫旅行へと誘う口調は自然で、細かい気遣いなのかお膳立ての一部なのか、行き届いた手配である。

こうして私たちは、はじまってしまった。日常とは切り離されたパリという舞台が、いっそう心を大胆に、そして素直にさせてくれたのかもしれない。彼に家族があることは、もちろん知っていた。けれどそんなことは、地球の裏側に降る雨のように、私には遠いことだった。Ｐ82

Mは旅行という日常とは切り離された空間で、薫里と二人きりの１週間という限られた時間の中、家庭のにおいを一切感じさせなかった、ということだろう。
それから８年間という長きに渡る時間が流れた。

パリから帰ってきて、週に二回はMと朝食をともにするようになった。Ｐ83
数ヵ月後、ー中略ー、Mの事務所のすぐ近くに、引っ越しをした。Ｐ83
引っ越しをしてその距離になって、朝食を一緒に食べることが、いっそう多くなった。Ｐ83
Mが東京にいるかぎりは、二日以上つづけて会わないということは、ほとんどない。Ｐ132
たぶん私は、Mの家族よりも、多くの時間を彼と共有しているだろう。Ｐ25

これほどの時間を共に過ごしながら、薫里は奇妙な確信をしている。

Mの妻は、私のことを知らない。Ｐ188

だがそれは、不自然としか思えない箇所がいくつかある。

ウィークデーは、彼が事務所に泊まることも多いので、そんなときは、ゆっくり夜を過ごせる。Ｐ25
Mの事務所で、遅めのランチを食べながら、そんな話をした。ー中略ーMが手際よく作ってくれ

たものだ。Ｐ99
Ｍの事務所に着くと、ドアホルダがはさまって、二センチほど扉が開いた状態になっていた。こういうときは、たいていシャワーを浴びている。Ｐ172
しょっちゅう泊まりに来ているので、メイク落としや愛用の化粧品の類は、小さなポーチに入れて、洗面所においてもらっている。Ｐ223

Ｍの事務所は、居住用のマンションと変わらない設備が揃っている描写がある。
だが、Ｍの妻についての描写に目が止まった。

子どもを二人育てながら、仕事も続けてきて、そのうえ几帳面できれい好きで、家事なども完璧にしないと気がすまない性格らしい。
「たとえば、靴下のたたみかたなんかも、こう、ちゃんと踵と踵を合わせて重ねないと、気持ちが悪いらしいんだよね」
苦笑しながら、Ｍはそんな話を聞かせてくれた。Ｐ50

そのような妻が、夫がひんぱんに寝泊りしている事務所に一歩たりとも近づかないことがあるだろうか？
仕事場といえど個人事務所で、夫が暮らしている部屋である。
単身赴任の夫を支える妻でも、掃除に訪れて当然だろう。
また、妻がもし「行きたい」と言った場合、Ｍはどうやって阻止するのか。
かたくなに拒めば疑われるだろうし、自由に掃除されても、証拠が出るだろう。
Ｍは妻の几帳面な性格を多少うっとうしがっているようだが、妻に居丈高な物言いをするわけでもなさそうだ。
薫里を不倫旅行へ誘った時の話に戻るが、ずいぶん手馴れている印象である。
空港までのスカイライナー、飛行機のチケット、パリでの宿泊先、これらはＭが手配している。
１週間の滞在なのだから、安くない出費であっただろう。
Ｍはカメラマンとして売れるまで、妻が生活を支えていたというのに、自由なお金ができれば不倫相手を作っているのだ。
そのような行状の男の妻が、不倫相手に気づかないほうがどうかしている。
薫里はＭの家族を壊したいわけではなく、Ｍとの結婚も望んでいない。

Ｍには家庭がある。その家庭を壊すようなことはしたくない。Ｐ288

だが、Ｍと薫里の日常から察するに、Ｍの夫婦関係は破綻していて、父子関係も円滑とは言いがたいだろう。

「私たちの恋愛は、半身浴みたいなものなの。ぬるま湯かもしれないけど、そこから生まれる汗

は濃いんだから。すみずみまで、温まるんだから」Ｐ189

友人から薫里とＭの不倫関係を「ぬるま湯感」といわれて、薫里はこう言えば良かった、と述懐している。
小説の全編が薫里の一人称で語られているのだが、恋愛観やＭに対しての言動は、３３歳としてはあまりに幼く、まるで関係が始まった２５歳のように思える。
Ｍへの恋慕、終わりを考えない不倫関係、将来の身の振り方、これら一切を深く考えることなく、刹那的な生き方で満足している。
それは、あまりに幼稚だ。
しかし薫里はあまりにぬるま湯につかりすぎたのか、トリアングル＝三角関係を始めてしまう。
まったく深く考えず、年下の男・圭と肉体関係を持った。

第２章　薫里と圭

薫里と圭は、薫里の友人の行きつけの飲み屋で知り合った。

ミュージシャン志望の、客観的に言えばフリーターの、二十六歳。Ｐ9
最初から懐かしい感じの男の子だった。昨日も一昨日も届けられた、新聞のように。Ｐ9
たぶん彼は、おそろしく貧乏のはずだが、「ブツヨクがない」とのことで、身にまとっている空気が、とても健やかだ。Ｐ10

薫里は圭にひかれたのか、それとも長年のぬるま湯な関係に刺激がほしかったのか。

彼のことを、もう少し知りたい、と思った。そんな感覚は、あまりに久しぶりなので、そのこと自体が、新鮮だった。自分が、Ｍ以外の人に、興味を持つなんて・・・。Ｐ13
今なら引き返せる、という気もするし、もう少し彼との関係を、深めてみたいような気もする。Ｐ24
やがて私は、一つのことに気づいて、強烈な後ろめたさを感じた。今私は、圭ちゃんとのことを考えているはずなのに、結局それが、Ｍとのことを考えることになっている。
なぜ、引き返そうとするのか。それは、Ｍがいるから。なぜ、深めてみたいと思うのか。それはＭとの関係が変化するのかどうか、たぶんそのことに、自分は興味があるから。Ｐ24
あえて言えば、私の人生にすでにＭは組みこまれていて、そういう人生を生きている私が、たまたま圭ちゃんと出会って、なんだか意気投合して、今日にいたっている・・・という感じだろうか。Ｐ116

圭との交際が深まり、圭は薫里との距離を縮めようとするが、薫里は離れようとする。
それは物理的にも、精神的にも。
夏の夜の花火大会に、飲み友達同士が集まる中、薫里は圭を誘い、参加した。

いちおう「飲み友だち」とは言ったが、今日この場では、私たちはワンセットとして参加している。こんなふうに誰かとオープンに第三者の前に出るなんて、久しぶりのことだ。Ｍとは、そういうことはしないようにしている。Ｐ106

暗がりで、圭が薫里の肩に手をまわしてきた。

「げっ」と思って、体がかたくなる。いちおう落ち着きをよそおって、「これこれ」とたしなめ、その手をはずした。
ー中略ー
Ｍだったら、こんなことはしないだろう。Ｍだったら、こんなことはできないだろう。でも、Ｍだったら、私は手をはずしただろうか・・・。

世界一用心深いつもりの自分が、そんなことを想像することさえ、以外だった。いったいどうしたというのだろう。Ｐ108、109

薫里は圭と時間を過ごしながらも、常にＭとの差異を感じ続けている。
いや、考えようとしている、とさえ言える。
肌身に染み付いた男の記憶を、いついかなる時も感じていたいから、手近な男として圭が選ばれたかのように。

そして薫里は、圭を得たことによって、逆に不安定になったりもする。
圭と少し距離を置いた薫里が、酔った勢いで自ら圭を呼び出して一夜を共にした。

勝手といえば、そんなふうに会わずにおきながら、昨晩は無理やり呼び出したりして。友人のカップルに刺激されたとはいえ、一貫性のないこと、はなはだしい。私はあのとき、寂しかったのだろうか？
私は、寂しかった？考えまいとしても、Ｍのことが頭に浮かぶ。彼は今夏休み中で、家族旅行に出かけている。
ー中略ー
娘のどちらかが受験生だった年をのぞいて、夏の家族旅行は恒例のことだ。
ー中略ー
そして、これも恒例のことなのだが、Ｍを送り出してしばらくすると、私は少し息苦しくなる。酸素が足りない金魚のように、心がぱくぱくする感じになる。Ｐ131、132

薫里はＭの不在を圭で埋めることはできない。
では薫里にとって、なんなのだろう。

二十六歳って、こんなに若かったんだ―圭ちゃんを見てみて、よく思う。やりたいことさえあれば、根拠のない自信を持っても、まだ許される年齢だ。２６歳の私は、どうだっただろう。フリーのライターとしてはまだ駆け出しで、がむしゃらに仕事をしていたころだ。そして、もちろん、恋もしていた。Ｐ10
圭ちゃんの、根拠のない自信や、あてのない夢を、たのもしく聞いていたころのことを、思い出す。あのころは、そんなふうに語る彼を、まぶしく見つめいていた。自分にも、こんな時代があったなあと思ったし、そんな彼を好ましく感じ、応援したいとも思った。
いったい、何が変わったんだろう。今の、この怒りにも似た感情は何なのだろう。Ｐ202
結局、圭ちゃんは変わっていないのだ。私の目が、勝手にまぶしがったり、冷ややかになったりしているだけなのだろう。Ｐ203

かつての自分を思い出したり、若者らしさに目を細めたり、青臭さに腹が立てば遠ざけようとし

たり・・・身勝手な感情をぶつけているが、それもすべて「年上の経済的に自立した女の余裕」と写る。
だが、薫里の弱さをもっともえぐるのは、圭だ。

圭ちゃんがいいヤツなのは、よくわかる。が、彼に人のよさを全開にして向かってこられると、自分がいやなヤツだということを、思い知らされるような気持ちになる。Ｐ157
自分では、矛盾していないつもりでも、どこかおかしいのだろうか。Ｍと私の関係、圭ちゃんと私の関係、そしてＭと私と圭ちゃんの関係・・・。Ｐ120

三角関係を知る友人から責められると、抗弁している。

不誠実とは、心外な。私は、Ｍに対しても、圭ちゃんに対しても、誠実に接してきたつもりである。Ｐ117
率直なところ、今から波風を立ているということが、とてもめんどうになっている。ひときわ機嫌よくしている圭ちゃんを見ると、その幸せを、もう少しそっとしておいてやりたいような気もする。Ｐ160

これのどこが、誠実なのだろうか。自分の都合で人の幸不幸を左右している、ただのわがままでしかない。
薫里は次第に圭を重く感じるようになる。
それは、薫里が圭に求めたものは「若者との交際ゆえの新鮮」で、つまり一時の交わりだったが、圭は「交際が深まり結婚」という至極真っ当なコースを望んだ。

彼を捨てたという自責の念によって、つらい思いをせずにすむ。
イヤな女である。でも、圭ちゃんにイヤな女だと思われて０になるのは、これまたイヤなのである。イヤな女だと思われずに０を選択してもらうには、どうしたらいいのだろう。Ｐ208

なんと自分勝手で不誠実なのだろうか。
別れたいのに切り出すのはいやで、おそらく軽蔑されるだろう二股の不倫関係を告白するのもイヤ、でもべたべたと恋人関係を重ねるのもいや。
身勝手そのものではないか。

圭ちゃんの影が、Ｍにかかったりしないように、充分な距離をとることが必要だ。Ｐ231

ここで完全に、薫里はＭとの関係を選択している。それは全編を通してただの一度も揺らがなかった。なぜこんな不毛な三角関係を持ったのだろう。
それともこれも必要な蛇行だったのか、ただのひまつぶしの成り行きだったのか。
薫里を通り過ぎ、結婚と恋愛の乖離を認識させた人物。

それが、圭だった。

第３章　薫里と結婚

薫里は、結婚を制度と考えている。

結婚なんて、ただの社会的な仕組みっていうか、制度でしょ。それと恋愛は関係ないし、よりよい恋愛ができるようになるなんて、とうてい思えないし　Ｐ254
制度にのっかって家庭を作るなんて、それこそ誰にでもできるじゃない。愛がなくても、続けられるじゃない。恋愛を育てていくことのほうが、努力もいるし、そこから得られるものも大きいって、私は信じてる。Ｐ254

この場面は、売り言葉に買い言葉が多分に入っている箇所だが、薫里が己の本音と向き合う場面でもある。
Ｍと出会う以前の交際に端を発している。
薫里はかつて、学生時代から交際した恋人がいた。

当時の私は、このままいけば、アイツと結婚することになるんだろうな、と思っていた。Ｐ56

だが、その恋愛は結婚に至らなかった。
交際相手が他の女性と関係を持ったことに始まる。

親友の葬式で再会し、彼女の相談相手をしているうちに、一度だけセックスをしてしまった。やがて、彼女が妊娠していることがわかった。
ー中略ー
一度そういうことがあったのは事実だから、僕は責任をとりたいと思うＰ57
「待ってほしい」とアイツは言った。とりあえず、彼女と籍は入れる。
ー中略ー
どうか、籍を抜くまでの一年、待っていてほしい。
やがてその約束は、「子どもが一歳になるまで」「子どもがものごころつくまで」と、延長されていった。
ー中略ー
「約束ってさ、その日が少しずつでも近づいてくるから、待ってられるんだよね。今、私が待っているその日は、だんだん遠ざかっていくばかりだもん。そんなの、もう約束って言えないと思う」Ｐ145

薫里は待つことよりも、別れを選んだ。

結婚なんてことに振り回されるのは、もうこりごりだ―そう思うようになったのは、アイツのことがあってからだ。Ｍと出会ったときには、最初から恋愛と結婚を、切り離して考えていた。

Ｐ255

では、なぜ薫里は、Ｍとの結婚を望まないのだろうか。

およそ、生きていて楽しいと思える時間のほとんどを、私はＭと共有してきた。それが、この八年だ。仕事をしていくうえでも、いつも心が安定していたのは、Ｍのおかげだと思う。
ー中略ー
Ｍと妻との離婚？　なんでわざわざ、そんな気の重いことを、しなくてはならないのか。Ｍと私の結婚？　別に私は、彼の家族になりたいわけじゃあない。
そして私たちは、自分でもあきれるほど、心地よい関係を築き上げてしまった。明らかに私は、Ｍのおいしいとこどりをしている。Ｐ49、50
ただ気づいたっていうのかな。結婚なんて考えないほうが、よっぽど自由に、深くつきあっていけるって。Ｐ213
結局、結婚というのは、恋人同士が（あるいは他人同士が）家族になりましょうという契約なのだろう。私は、Ｍの家族になりたいとは思わない。Ｐ243

薫里は年末、毎年福井県両親の元へ帰省している。
そして、日がな母と過ごす。

「結婚はともかく、子どもを生むっていうのはすばらしいことよ。それだけは、自信を持っていえるわ」Ｐ237

俵万智のエッセイには両親姉弟という平均的な家族が描かれている。両親の夫婦としての仲のよさも、時に描かれている。だが、こちらのほうが本音だろうか。

それはやはり、Ｍに妻子がいるからだ。もちろん、彼との恋愛は、そのこととは無関係に成り立っている。世界じゅうの誰に向かっても、うしろめたくないと思っている。が、やはり母には話せない。Ｐ241

Ｍの妻子にも、自分の親兄弟にも話せない恋愛が、うしろめたくない？
この矛盾が矛盾でないことが、理解できない。
Ｍと会えなければ制御できない気持ちを抱えながら、妻子と無関係に成り立っている？
呆れるばかりである。

結婚というのは、社会的なもので、こういう制度に納まりますんでひとつヨロシクという宣言だろう。窮屈だったり面倒だったりもするが、そのかわりに恩恵も受けられる。だから「打算では結婚しない」なんてやせ我慢する必要はなくて、結婚するなら大いに打算的であっていい、と私

は思う。Ｐ242

これは、作者の本音であり、意地だと思う。家族は制度でしかない、恋愛に制度は必要ない、恋愛こそが自由に深く相手を愛することができる・・・はっきり言えば、不倫した人間の常套句といえる。

「制度にのっかって家庭を作るなんて、それこそ誰にでもできるじゃない。愛がなくても、続けられるじゃない。恋愛を育てていくことのほうが、努力もいるし、そこから得られるものも大きいって、私は信じてる」Ｐ254
結婚について考えたことは、こうだった。お互いの関係が、よりよくなると思えるのなら、結婚すればいい。そうシンプルに考えた結果、私のなかで、恋愛と結婚はセットにはならなかった。Ｐ302
そして今や、決して結婚などを迫ってこない男をこそ、私は必要としている。Ｐ255

だから、不倫関係を続けるつもりはあっても、終わるつもりはない、ということか。

第４章　薫里と出産

薫里は結婚をすることは考えていないが、出産はどうだろうか？
三十三歳といえば、高齢出産も目前の年齢だ。

もう絶対に、生物学的に子供は生めないという状況になったとき、はたして自分は、納得できるのだろうかＰ286
そしてたぶん、自分が四十歳になるまでに、Ｍ以上の人に出会うことはないだろう。だったら私にとって、子どもを生むかどうかという問題は、Ｍとのあいだに子どもが欲しいかどうか、ということにある。Ｐ286
ごく素朴な希望として、子どもを生んでみたいとは思う。それはまだ、意志というよりは、興味というのに近いものだが。
ー中略ー
自分が生むとしたら、相手はＭしかありえない。けれど、Ｍには家庭がある。その家庭を壊すようなことはしたくない。ならば、自分一人で育てる覚悟が必要だ。はたして、そんなことができるだろうか。
ー中略ー
何の障害もなければ生んでみたいと思っているわけで。ポンポン。ならば、生まないという選択ではなく、障害を乗り越えてみようという選択が見えてくるのではないか。ポンポンポン・・・。Ｐ288

婚外子という前提を深く追求せず、ただ己の欲求のみで考えている。
生まれた子供が一人の人間として成長することを、微塵も考えていない。
他の子供が当然のように受ける両親からの愛情を与えられないことが、わかっているのに。
それなのに、自分の気持ちひとつで、命を裁量しようというのか。
また、Ｍとの関係がどう変わるのかも、まったく考えていない。
妊娠出産を経て、不倫相手ではなく子どもの父親として、内縁の妻として生きていくのかどうか、といったことも書かれていない。
婚外子を出産すれば、認知の問題もある。
Ｍに認知を迫った場合、Ｍの妻子が婚外子を知ることになる。
Ｍが認知できなければ、私生児となる可能性が高い。
子どもの人生が茨の道になることは、考えないのか、考えたくないのか。
俵万智氏は、かつて高校で教鞭をとった人物である。
子どもを教育する職業につきながら、自身の子どもに対する責任感は皆無なのか。

たぶん子どもは、なにかのために生むのではない。私が、その子に会いたいから生む、会いたい気持ちをあきらめたくないから生む―決意するとしたら、そういうことではないだろうか。Ｐ303
恋愛と子どもが、それほど密接ではないということは、離婚した友人たちを見ていて思うことで

もある。かつてのパートナーへの愛情がすっかり冷め、憎んでさえいる場合でも、子どもを抱きしめる力が弱くなることはないようだ。それほどの存在に出会ってみたい、とは思う。Ｐ303

小説は妊娠を暗示する場面で終わっている。

おわりに

私は、この小説は俵万智氏が、将来成長したわが子に、母の恋愛と妊娠を考える経緯を伝えるために書き記したものではないか、と思った。
フィクションというには過剰なまでにリアルと同一の要素をちりばめ、非常識と思えるほどの赤裸々な論理を展開している。
小説に挿入された短歌は、別の歌集にも所蔵されている。
が、歌集には、薫里の恋愛にはそぐわない短歌もあった。

　歌集チョコレート革命
携帯電話にしかかけられぬ恋をしてせめてルールは決めないでおく　Ｐ120
一枚の膜を隔てて愛し会う君の理性をときに寂しむ　Ｐ122
家族という制度のなかへ帰りゆく君はディオールの香り残して　Ｐ123
泥棒猫！　古典的なる比喩浴びてよくある話しになってゆくのか　Ｐ129
葉月里緒菜になれぬ多数の側にいて繰り返し読むインタビュー記事　Ｐ130
妻という安易ねたまし春の日のたとえば墓参に連れ添うことの　Ｐ132
知られてはならぬ恋愛なれどまた少し知られてみたい恋愛　Ｐ142
「夫婦などつまらぬ日常」と言う君の日常の語が我には眩し　Ｐ150
焼き肉とグラタンが好きという少女よ私はあなたのお父さんが好き　Ｐ154

これらの歌からは、倫ならぬ恋、男を挟んで妻を妬む、妻子ある男性、が浮かぶ。
そして、さらに別の歌集を読む。

　歌集プーさんの鼻
どこまでも歩けそうなる皮の靴いるけどいないパパから届く　Ｐ14

俵万智氏は、四十歳にて出産された。
こちら読んで、私は驚くと同時に、とても混乱した。
不妊治療を受けながら妊娠されたような歌があった。
婚外子を授かるために、そこまで努力することが、私の理性の範疇を超えていた。
結婚しない、結婚したくない、だが、子どもは生んでみたい、という思い。
共感はできないが、理解できる。
だがそれは、子どもを自然に授かれたら、という注釈つきだった。
専門的な話を聞き、排卵日を割り出し、妊娠するために愛し合う・・・
授かる命に、あるべき両親の姿はなく、母親一人だけ、という子どもに会うために。
ここに至って、私はトリアングルについて、個人的な感想を書くことを決めた。
そうすることで、自分の気持ちを見つめなおし、理性を保つために。
話を戻す。

俵万智氏は、未婚の母となったが、やはり男性とは一緒にいられなかったようだ。

　　歌集プーさんの鼻
もう会わぬと決めてしまえり四十で一つ得て一つ失う我か　Ｐ14

出産と別離を小説に書かなかったのは、書けなかったのか、書きたくなかったのか。
うかがい知ることはできないが、婚外恋愛と妊娠（出産ではない）がテーマだから、あえて書く必要もなかった、と、解釈しておく。